

第2章 考 察

第1節 列状土坑群の性格について

清水邦彦・辻 康男

(1) はじめに

今回の中条小学校遺跡の調査では、列状に並ぶ土坑群を検出した。従来、類例が知られていなかった遺構群であり、その性格の特定は非常に難しいと言わざるを得ない。ただし、中条小学校遺跡のほかに、東奈良遺跡においても過去の調査の再検討の結果、列状土坑群が検出されていたことが明らかとなった(清水 2013、清水・辻 2014)。本稿では、今回の調査成果および東奈良遺跡の事例を併せ、列状土坑群を周辺の集落構造のなかでの位置付けをおこなう。さらには、自然科学分析の結果を踏まえたうえで、列状土坑群の性格について言及することを目的とする。

ここで用いる「列状土坑群」は、個々の土坑が複数の列状に配置され、総体として帯状をなす土坑群をさす(清水・辻 2014)。

(2) 中条小学校遺跡の事例

本報告の「列状土坑群の調査成果」と重複するが、便宜上ここでも概要を紹介しておく。

中条小学校遺跡で発見された列状土坑群は、121 基の土坑が約 7 列の列状に配置され、南北 80m にわたって帯状に続いていた。さらに、南北ともに続いていくと考えられ、総延長はより長いものであったと想定される。また、調査区南端で若干東へ屈曲している。

個々の土坑については、長軸 2 ～ 3 m 程度、短軸 1 m 程度、検出面からの深さ 40cm 程度のものが多いが、ばらつきはある。土坑の形状についても個々で若干異なるが、似た形状の土坑がかたまって存在する傾向が認められ、掘削した人の「くせ」等の可能性が想定される。

列状に並ぶ土坑の列がずれる箇所がある。土坑 36 と 37、59 と 60、70 と 71 の間である。3 列まとめてずれることから、土坑の掘削単位を想定することが可能である。また、この地点に関しては掘削が両方向から進行した結果と想定される。このような土坑群は時間をかけて掘削されたのではなく、同時期に一齐に掘削されたと考える方が妥当であろう。

土坑の埋土については、個々で堆積物は異なるものの、全ての土坑埋土が自然堆積であることが大きな特徴である。堆積物の違いは、土坑周辺の地表環境の差異に起因すると考えられる。

出土遺物は非常に少ない。出土しても土器の細片であることが多く、実測可能なものは少なかった。また、土坑 117 における最下層からの土器の細片の出土例を除き、ほかの土器はすべて土壌化した上層からの出土である。土器の所属時期は庄内式前半に位置付けられることから、土坑群があまり時間をおかず掘削されたと考えるならば、列状土坑群の時期の下限を庄内式前半に求めることができる。

(3) 東奈良遺跡の事例

東奈良遺跡の列状土坑群は 4 ケ所の調査区で検出されている(第 17 図)。従来は、溝状遺構(田代・奥井編 1976)や土壙墓(奥井 2012)として認識されていた。しかし、過去の調査資料を再検討し

た結果、個々の土坑が複数の列状に配置され総体として帯状をなす点、埋土が自然堆積である点、土坑内から土器は底から浮いた状態で出土する点、時期は庄内式である点など、中条小学校遺跡の事例と酷似しており、同じ列状土坑群として認識できる。

第 17・18 図－②では、21 基の土坑が横 3 列に並んだ状態で検出された。大量の土器が土坑内から出土しており、「大溝（弥生時代後期後半～庄内）」とほぼ同時期かそれ以降のものとされ、他地域（山陰系か）の甕も含んでいたとのこと」（奥井 2012）である。

第 17・18 図－③では、少なくとも 2 基の土坑が列状土坑群を構成するものと考えられる。②に南接し、やや東にずれた調査地点であるため、②の列状土坑群の最も西の列の続きと想定される。

第 17・18 図－④では、8 基の土坑が検出された。3 列に並んでいるが、東側は調査区外に続くため、何列であったかは不明である。

第 17・18 図－⑤では、溝状遺構（田代・奥井編 1976）として認識され、遺構配置図ではすべての土坑が描かれていない。しかし、遺構検出時の写真を見れば、列状土坑群であることは明白である。また、ここでは横 6 列に並ぶことを確認できる。

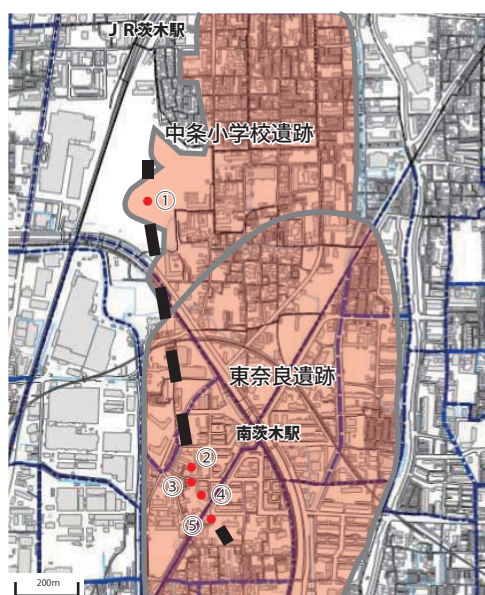
これらの事例は中条小学校遺跡例と同様にほぼ南北軸をとる点、中条小学校遺跡例の南端は東奈良遺跡例に向けて屈曲していく点から、両遺跡の事例はつながる、もしくは関連する遺構である可能性がきわめて高いと判断できる。ただし、東奈良遺跡例は土坑からの土器の出土量が多い地点が存在することが中条小学校遺跡例と異なる。

（４）集落構造のなかでの位置付け

列状土坑群の性格を考えるうえで、列状土坑群が集落のなかのどこにあるのか、もしくは微地形のなかでの位置づけは重要な問題である。

中条小学校遺跡の調査では、列状土坑群と同じ調査区内の、北東約 50m 離れた地点で、弥生時代後期から庄内式前半にかけての集落跡が検出されている。一方で、列状土坑群の西側には、当該期の集落跡は認められない。

東奈良遺跡例においても、中条小学校遺跡例と同様、東側には集落域が広がるのに対して、西側に



第 17 図 列状土坑群の位置図



第 18 図 東奈良遺跡の列状土坑群

は当時の顕著な遺構は認められない。そのため、両遺跡の列状土坑群は集落域の縁辺を巡るように位置していたと考えられる。また、東奈良遺跡例の場合、そのすぐ東は東奈良遺跡の中心部付近である。そのため、中条小学校遺跡例とは異なり、土器の出土量が多かったと想定される。ただし、土器は土坑底部から浮いた状態での土器の出土は共通しており、土坑が2次的に廃棄土坑として使用されたとしても、本来の用途とは別に考える必要があるだろう。

また、これまでの両遺跡の調査結果をふまえると、列状土坑群は沖積低地に面する両遺跡の東側に存在しておらず、後背地に丘陵や台地（沖積扇状地上位面）が広がる遺跡西側のみに形成されていたとみなすことができる。東奈良遺跡では、遺跡東側の沖積低地に近い領域において、弥生時代から古墳時代前半の流路や溝などの遺構が存在することを確認できる。一方、列状土坑群が存在する両遺跡の西側では、当該期の流路や溝などの遺構の分布が希薄であり、さらに開析谷などの谷状地形もほとんど存在しておらず、比較的平坦で高燥な氾濫原面が広がっていたと考えられる。このようなことから、中条小学校遺跡と東奈良遺跡の西側と東側では、微地形や遺構分布に差違が認められる可能性を指摘できる。

（５）自然科学分析の結果

中条小学校遺跡例で実施した自然科学分析のうち、列状土坑群の性格特定に有効なものについて触れておく。

土坑 70 の堆積物の土壌薄片の観察から、土坑の堆積についての検討をおこなった。その結果、土坑内の堆積は肉眼観察と同様、自然堆積であることを確認できた。そのほかにも、土坑は掘削後、比較的早い期間で堆積が進行したこと、土坑の掘削時に生じた土の再堆積は認められないことを明らかにできた。堆積の進行については、調査期間中に完掘後の土坑を放置し、1ヶ月間でどのように堆積するのかという実験もおこなった。実験は冬におこない、土坑の壁が剥落したブロック状の堆積および周囲の地表物質が風雨によって自然に堆積する過程が認められ、箇所によっては数 cm 程度の堆積が認められた（写真図版編 図版 86）。

土坑 70 の堆積物および基盤層のリン・カルシウム分析をおこなった。その結果、リン酸・カルシウム含量は、そもそも自然に含まれている量の範囲内であった。そのため、土坑 70 内に動物遺存体などに由来するリン酸の供給はなかったと考えられる。

基盤層と出土土器の胎土分析をおこなった結果、出土土器よりも基盤層の方が粗い粒子を多く含むことが明らかとなった。土器製作の際、粘土に混和材を混ぜることを考えれば、基盤層の土が土器製作の粘土として使用されたとは考えにくい。

土坑 70 および集落域に位置する井戸 1600 の埋土の植物珪酸体分析をおこなった。特筆すべき点は、井戸 1600 で未検出であるヨシ属が土坑 70 で検出されたことである。ヨシ属は湿潤な地表を好むことから、土坑内が湿地となる局地的な埋没環境、もしくは列状土坑群周辺は集落域よりも全体的に低く、湿潤な地表環境のどちらかが想定される。検出面をみると、集落域は列状土坑群周辺より 50cm ほど高い。土坑の断面観察から、土坑の堀方が検出面より 50cm も上にあるとは考えにくいいため、後者の可能性が有力であろう。

（６）列状土坑群の性格について

列状土坑群の性格については、大きく二つの方向性に分けて考えることができる。掘られた土坑そのものに意味がある場合と、掘りあげた土に意味がある場合である。また、前者の場合でも、個々の土坑で意味をもちえた土地利用、例えば土壇墓、ゴミ捨て穴、木器貯蔵穴などといった可能性と、全体として意味がある土地利用、例えば区画的なものであった可能性などを考えることができる。一方、後者であれば、土坑を掘ることによって得る土の利用、例えば粘土採掘坑であった可能性などを考えることができる。また、両者の利用を併せもつ可能性も当然、想定できるだろう。

土坑が列状に並ぶことから、墓である可能性がまず想起される。しかし、土坑埋土が自然堆積である点から、土坑が墓であるとは首肯できない。リン・カルシウム分析の結果もこれに矛盾しない。ゴミ捨て穴や木器貯蔵穴の可能性も、中条小学校遺跡例は遺物がほとんど出土しないことから難しいと考える。東奈良遺跡例は土器が出土しているため、ゴミ捨て穴としての利用は否定できない。しかし、土器は底から浮いての出土であるため、土坑群が掘られた本来の用途とは分けて考えるべきだろう。また、墓以外の利用については、土坑を列状に配置することについての説明が難しい。

土坑内堆積の土壌薄片の観察の結果、掘削土の再堆積が認められなかったため、掘削土は列状土坑群の周辺になかったと考えられる。これは、粘土採掘坑の可能性に矛盾はしない。しかし、胎土分析の結果は、粘土採掘坑の可能性に否定的である。また、他の可能性と同様、個々の土坑を複数列に配置する点も説明が難しい。

可能性としてのこのころのは、列状土坑群が区画的なものであった可能性である。これは、個々の土坑を列状に配置する必要があったことを説明できる、現段階では最も有力な可能性といえる。

（７）おわりに

本稿では、列状土坑群の性格の解明を目的として、各事例の検討および集落構造のなかでの位置付け、さらには自然科学分析の結果を踏まえたうえで、列状土坑群の性格について言及した。

論証は、特定の用途を示す証拠は得られなかったため、調査成果から複数の仮説を提示し、検証することで棄却する方法を採った。その結果、集落の縁辺を巡り、区画的な性格をもつ遺構群であるという結論にいたった。しかし、この論証方法は仮説提示の段階で誤りがあれば、結論もまた誤ることになる。新たな検討や事例の増加から他の仮説が想定できる場合、本稿の見解とはまた別の見解が提示されることもあるだろう。また、中条小学校と東奈良遺跡の西側と東側における微地形と遺構分布の差異と列状土坑群とのあり方についても課題である。今後も検討を重ねていくことで、列状土坑群の性格について迫っていきたい。

参考文献（五十音順）

奥井哲秀 2012「弥生時代の茨木市域」『新修茨木市史』第1巻通史Ⅰ 茨木市史編さん委員会

清水邦彦 2013「茨木市中条小学校遺跡の調査－列状土坑群の調査－」『第16回近畿弥生の会奈良場所発表要旨集』近畿弥生の会

清水邦彦・辻康男 2104「列状土坑群の性格について」『日本考古学協会第80回総会研究発表要旨』日本考古学協会